

令和7年度小学校教科担任制実施報告書(高学年型)

学校名
廿日市市立佐方小学校

1 学校の概要

(1) 学校の学級数

	通常学級							特別支援学級	合計
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計		
学級数	3	4	3	3	3	3	19	4	23

2 加配教員が専科指導を行う教科及び週当たりの担当授業時数

(1) 第5、6学年の指定教科

指導教科名	指導学年	指導学級数	1学級当たり時数(週)	授業時数(週)	兼務校での実施
理科	5	3	3	9	
理科	6	3	3	9	

授業時数 計 18 (a)

(2) その他

指導教科等名	指導学年	指導学級数	1学級当たり時数(週)	授業時数(週)	兼務校での実施
理科	3	2	2.6	5.2	

授業時数 計 5.2 (b)

授業時数 合計 23.2 (a)+(b)

3 教科担任制推進教員を配置した授業計画

教科等	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育	外国語	道徳	総合	特別活動
週当たり標準授業時数	5		3	5	3	1.4	1.4	1.6	2.6	2	1	2	1
6年 1組 (担任: A)	A	A	A	A	推進	専科	B	専科	C	A	A	A	A
6年 2組 (担任: B)	B	B	B	B	推進	専科	B	専科	B	A	B	B	B
6年 3組 (担任: C)	C	C	C	C	推進	専科	B	専科	C	A	C	C	C

教科等	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育	外国語	道徳	総合	特別活動
週当たり標準授業時数	5		2.9	5	3	1.4	1.4	1.7	2.6	2	1	2	1
5年 1組 (担任: D)	D	D	F	D	推進	専科	D	専科	D	E	D	D	D
5年 2組 (担任: E)	E	E	F	E	推進	専科	E	専科	D	E	E	E	E
5年 3組 (担任: F)	F	F	F	F	推進	専科	F	専科	D	E	F	F	F

教科等	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	図工	体育	道徳	外国語活動	総合	特別活動
週当たり標準授業時数	7		2	5	2.6	1.7	1.7	3	1	1	2	1
3年 1組 (担任: G)	G	専科	G	G	推進	G	G	G	G	G	G	G
3年 2組 (担任: H)	H	専科	H	H	推進	H	H	H	H	H	H	H

4 高学年担任が指導を行う教科等及び週当たり授業時数

学年・学級	児童数(人)	担任	担任する学級以外の授業時数(週当たり)				担任する学級の授業時数	授業時数の合計
			指導学年・学級	教科等名	時数	時数計(c)		
6年1組	30	A	6年2組	外国語	2	4	19	23
			6年3組	外国語	2			
6年2組	29	B	6年1組	図工	1.4	2.8	21	23.8
			6年3組	図工	1.4			
6年3組	30	C	6年1組	体育	2.6	2.6	19.6	22.2
5年1組	35	D	5年2組	体育	2.6	5.2	18	23.2
			5年3組	体育	2.6			
5年2組	35	E	5年1組	外国語	2	4	17.4	21.4
			5年3組	外国語	2			
5年3組	35	F	5年1組	社会	2.9	5.8	18.3	24.1
			5年2組	社会	2.9			

5 成果と課題

(①授業の質の向上、②多面的な児童理解、③小・中学校の円滑な接続、④教師の負担軽減、⑤その他)

〈効果のあった取組〉	
①	主体的・対話的で深い学びの実現と学習意欲の向上につなげるため、各教科の教員が専門性を発揮できるよう担当教科を決定した。
②	児童の小さな変化に気付き、学習や人間関係における困り感の早期発見・早期対応につなげるため、5・6学年の担任や教科担任制推進教員等、複数の教員で指導を行い、放課後等の時間を活用して情報共有を行った。
③	中1ギャップの解消を図り、安心して中学校に進学できるよう、6年生では4教科において教科担任制での学習スタイルを経験している。
④	業務に対する心理的負担感の軽減を実感できるよう、第5、6学年各担任の教材研究を行う教科をその教員の担当教科に限定している。



〈成果〉	
①	各教科の教員が専門性を発揮しながら授業づくりや評価方法を相互に共有できた。その結果、児童アンケートの「教科担任制で学ぶことで、勉強の内容がよく分かるようになりました。」の項目で、本校児童の90.2%が肯定的に捉えており、推進校全体より0.6%上回ることができた。
②	指導者アンケートの「授業を担当している学級や児童に対して、組織的な生徒指導ができています。」では、担当者全員が肯定的に捉えていた。 児童アンケートの「教科担任制で学ぶことで、分からないことや困ったことを相談できる先生が増えました。」では、本校児童の85.4%の肯定的に捉えており、推進校全体より9.2%上回ることができた。
③	児童アンケートの「中学校から教科ごとに先生が代わることに對して、不安がなくなりました。」では、本校児童の83.2%の児童が肯定的に捉えており、推進校全体より0.5%上回った。
④	指導者アンケートの「指導教科数の減少により、教材研究の時間の確保等、業務改善につながっている。」では、担当者全員が肯定的に捉えていた。

〈課題〉	
①	5・6年生の約9.8%の児童が、「教科担任制で学ぶことで、勉強の内容がよく分かるようになりました。」の設問に否定的評価をしている。
②	5・6年生を担当する教員が全員で集まって情報共有をする機会を十分に確保することは難しかった。
③	教科担任制に焦点化した小中での情報共有の時間が取れるとよい。
④	担当教科によっては、持ち時間数に偏りが生じてしまい、空き時間が少なくなってしまう教員がいた。



〈対策〉	
①	引き続き、学習の内容がよく分かる授業準備・改善を進めていく。 指導者アンケートでは、「教材研究の深化や教材の工夫による授業改善につながっている」や「担当する教科に対して、系統的な指導ができています」では、本校はいずれも100%肯定的回答であったので継続して取り組んでいく。
②	年度当初や長期休業中に、特に配慮を要する児童について教職員全体で共有する。
③	今後、小中連絡会などの機会を活用し、中学校における教科担任制のノウハウなどを共有する。
④	次年度は、各担任の希望を踏まえ、さらに空き時間の確保も考えながら教科担当を決定する。